

## 次回企画展予告

第19回企画展

朝鮮陶磁シリーズ-13

# 「李朝秋草展」

会期：昭和63年10月18日(火)～11月23日(水・祝)

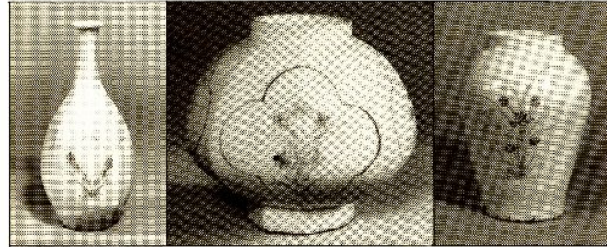
会場：当館企画展示室

### ■「李朝秋草展」

李朝の青花は、1460年代にはすでに焼成が始まっていたと考えられている。初期の遺品よりその絵付は、青花の顔料であるコバルトが高価な輸入品であったところから、中国の画法を学んだ画員(宮中の絵師)が、わざわざ広州の窯場に向かい、器物の肌を画布に見立てて絵筆を執っている。当然、そこに描かれた文様は、中国のそれに似たものになる。

次に青花の作品が比較的多く現われるのは、17C末頃から18C前半にかけてで、この期の李朝は、清を宗主国として事大の礼をとる半面、反清気分の強い時である。そのため、青花の文様は、中国の画風とは違い筆数が少なく、簡素な中にも風韻に富んだ李朝独自のものになってくる。中でも、柔らかな白磁の肌に余白をたっぷりとり、やや淡い青料で石竹(撫子)、蘭、菊などの草花を清楚に描いた一群の作品がある。大正から昭和にかけて、日本人はこれらを特に「秋草手」と称し珍重した。この秋草手は、今日に至るも李朝陶磁の愛好家にとっては垂涎的の作品である。

この企画展では、秋草手の作品を草花のみを描いたもの、草花に梅竹の「歳寒二友図」や、宝尽し、如意頭文などを添えたもの、また文字を記したものに分類し時代を考察するとともに、秋草手と日本人との係わりをも探ろうとするものである。(K)



青花 草花文 面取瓶

青花 紫絵草花文 面取盃

青花 草花文 壺

### 次々回企画展予告

## 「シカゴ美術館 中国美術展」(仮称)

会期：昭和64年2月11日(土・祝)～3月21日(火・祝)

シカゴ美術館(The Art Institute of Chicago)に収蔵される東洋美術の3大コレクション(タイソン・コレクションの中国・朝鮮陶磁、バックingham・コレクションの中国青銅器、ゾンネンシャイン・コレクションの中国玉器)など工芸の名品を105点厳選し、初めて大規模の海外貸出が実現するものです。

### お知らせ

第11回講演会を下記の如く開催します。

日時：昭和63年11月5日(土)

午後1時半～午後3時半

場所：中之島中央公会堂 3階中集會室

講師及び演題は未定です。決まり次第葉書にて、お知らせ致します。

### 編集後記

8月25日、日本経済新聞社との共催で国際的ヴァイオリニスト・江藤俊哉氏をお招きして、日経紙面の公募によるギャラリー・コンサートを催しました。初めての試みですので、何かと準備が大変でした。2階の展示ロビーをコンサートの会場にするため、閉館後、急いで100余りの椅子を地下の講堂から運び上げなければなりません。副館長の総指揮下、職員総出で、椅子を運び定位置に並べる作業を分刻みのスケジュールで行いました。なんとか予定通り30分で作業完了、全員、ほっと致しました。(O)

1988年9月15日発行(年4回)Vol.4 2(通巻13号)

大阪市立東洋陶磁美術館



# 友の会通信

ASSOCIATES NEWS

No.13

編集 大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局  
発行 〒530 大阪市北区中之島1-1-26 TEL. 06(223)0055

## 美術館の舞台裏 (10)

現在、当館の企画で、山梨県立美術館で、「李朝陶磁 500年の美展」を開催中です。ついこの春には、福岡県立美術館で、同じ出品内容による展覧会を開催いたしました。二つの会場を比べてみると、まったく同じ出品内容の展覧会でありながら、まるで二つの違った展覧会を見たような印象すら受けま。もちろん、会場の広さ、構造、展示ケースの配置や色などの相違による雰囲気の違いが大きく影響しているのでしょうか。しかしそれだけではないような気が致します。その理由を考えると、展示プランにおける作品の GROUPING (グループ分け)と GRADING (等級分け)が大きな役割を果たしていることに気付くのです。今回はグループピングについて触れてみましょう。

グループピングとは、何らかの共通項を見出して、何点ずつかを一つのグループに組み合わせることを言います。判りやすい例として、10個のリンゴを並べるとしましょう。この場合、どのような並べ方があるか。富士が4個、紅玉が6個あるとすると、大きく種類別に(富士4)+(紅玉6)という分け方がある。今度はその種類別の中でも大きさという点に注目すると、大小があり、その大小のグループピングはたとえば(大大小)+(大)、(大大)+(中)、(大)+(大小大)といった並べ方ができます。大きさというポイントのほかは、赤や青のリンゴの色、形の整ったものと凸凹の多いもの、柄の大きいものと小さいものなど、いろいろのポイントがあり、どのポイントを選ぶかによって、グループピングにはさまざまな方法があることがお分かり頂けると思います。そして展示する空間の幅、奥行、高さ、質などの条件から、どういうグループピングをしたら、最も個々の物の特徴がよく現えられるか、美術品の場合なら、最も美しく見えるかが決まってくるのです。このグループピングを理屈だけで考えると、どうしてもしっくり来ないことが多いようです。見た感じが不釣り合いなようにも、理屈だけで割切って強引に展示している例、あるいは極端な場合、グループピングの意識もなく、無闇に等間隔で作品を羅列的に展示している例すらよく見られます。適切なグループピングは、展示の順序に一種のリズム感を与えます。鑑賞者に快い緊張感を呼び起こしながら、見終わった後の充実感をもたらします。グループピングの出来不出来が、展示プランの成否に大きく影響するのです。

大阪市立東洋陶磁美術館  
館長 伊藤 郁太郎



◆第10回講演会要旨◆

# 「李朝の文房具」

日時：昭和63年7月2日(土)

午後 1時半～3時半

会場：大阪弁護士会館・6階大会議室

講師：大和文華館 学芸部次長 吉田宏志氏

東洋陶磁美術館で開催中の「李朝の水滸展」に関連して、李朝の文房具について、お話しさせていただきます。

李朝という時代は、1392年から1910年まで、519年続いた非常に長い王朝です。朝鮮半島は歴史的に見ても、中国や日本からの外任により、常に不安定な状況でありました。そんななかで、このような長期間にわたり、一つの王朝が存続し得たということは、注目すべきことです。このことには、李朝時代の國家の指導理念であった儒教の果たした役割が大きいと考えられます。そして、この李朝時代を導いた中心的な存在であったのが“士人”(ソンビ)と呼ばれる文人達でした。士人になるためには、科擧という官吏登用試験にうかがうことが必要であり、そのためには、儒教の学問とともに、漢詩に代表される芸術的な素養が非常に重視されました。また、士人達は肉體労働をたいへん嫌い、反対に“閑”即ち風雅・粹といったようなことを非常に尊ぶという風潮が生じました。従って李朝時代とは、このように文化や教養が非常に重視された時代であったと言えます。

ところで、この士人達は、平素は、舎廊房とよばれる部屋で読書や詩作に耽ったり、來客と風流を楽しんだりしています。この舎廊房を形作るために必要なものが何かというと、文具と文房家具であります。儒教は儉素質朴を旨とするため、これらの文具・文房家具も実用性主体の合理的な形態となり、日本では考えられないくらいに、これらを中心とした、舎廊房文化・書齋文化が発達したのです。文房家具には、本棚・四方卓子(飾り櫃)・文匣(文具入れ)・硯床(硯台)・硯匣(硯箱)・書案(文机)(Fig. 1)等があります。また、文具には、紙筒、筆筒(Fig. 2)・筆洗・筆架・墨・墨床・硯屏・硯・水滴(硯滴)・書銀等があり、以上のようなものが舎廊房を飾っているのです。このような文具・文房家具に囲まれた舎廊房というものに思いを馳せてみますと、中央に書案が備えられ、後方には屏風が、周囲には本や文具が置かれ、墨や書物の香り、これを文香・書香などといいますが、それが満ち満ちて、非常に学問的雰囲気のある空間だったと思われま

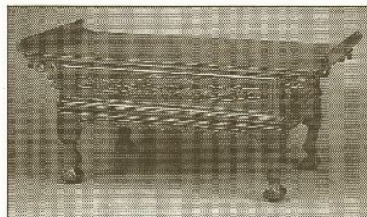


Fig. 1 書案(文机)

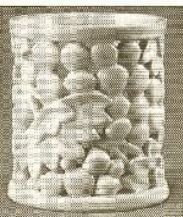


Fig. 2 筆筒

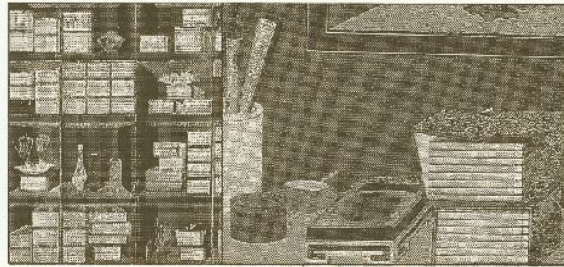


Fig. 3 李朝民画 書齋風景 Fig. 4 李朝民画 書齋風景

李朝の文具尊重の長い伝統は、一例として、李朝民画の中に文房図屏風(Fig. 3)という、中国にも日本にも見られないジャンルを発達させました。これは屏風に書棚や紙・墨・硯・筆の文房四宝やその他の文具、士人の身の回りに置くメガネ・茶器・扇子・時計・花などの愛玩物などが描かれているものです。文房図屏風(Fig. 4)は、基本的には学問崇拝を表わしたのですが、李朝の全時代を通して見ると、必ずしもそうとは限らず、例えば美学派の台頭した18世紀以後には、朱子学一辺倒の保守的な体質を批判して、壊れたメガネ、蜘蛛の巣のかかった書棚などを描いて、学問の否定を暗示したものなども見られます。

また、舎廊房に不可欠のものとして、文具や家具以外に、玄琴・短笛・洞簫などの楽器があります。「琴棋書画」という言葉がありますように、文人のたしなみとしての楽器は中国・朝鮮・日本に共通のもので、その上で、朝鮮半島においては、独自の楽器や詩歌があり、士人達が集い、音楽を楽しむということが重視されていたのです。更に、舎廊房には、平床(寝台)・竹夫人・屏風・キセル・タバコ盆・匣具などの様々な道具があります。そして、これらは、士人の財力にみあって、整えられていました。しかし、本来儒教とは人間の欲望を抑える教義であるので、このように高価な愛玩物に執着することはタブー視され、「玩物喪心」(愛玩品に心を奪われると、男子としてなすべき仕事がかたくなる)という言葉で戒めています。しかし、それでも文具愛玩の思いは断ち難いらしく、その一つとして、今展覧会で見られるような、非常に多様な水滴が残されているのだと考えられま

次に具体的に文房四宝を中心とした文具について述べてみましょう。

### 〈紙〉

朝鮮半島の紙は、新羅時代から非常に有名で、高麗時代には、宋の人々が高麗紙としてたいへん崇めたものです。徐有集(1764~1845)の「林園經濟志」にも朝鮮半島の紙がいかに優れているかが述べられています。紙は平安道・咸鏡道を除く全道で生産されており、特に朝廷で使われるものはソウル北方の北岳の近くに製紙所があり、そこで作られていました。また、中国・日本に対しての進上の品としては、全羅南道の全州と南原で作られたものが使われました。素材は楮が中心で他にも様々なものが使われていて、紙の呼称も50以上に及んでいます。このように、朝鮮半島では非常に古くから、紙の文化が進んでいたことがわかります。

### 〈筆〉

文房四宝の中で筆だけは、新しいものが良いとされています。筆で重視されたのは、尖(とがった)・齧(堅った)・円(丸い)・健(堅固)の四つの条件です。筆は筆先と筆軸で構成されますが、その筆先には、鳥・虎・鹿など様々な種類の動物の、秋から冬の間の特に栄養の貯えられた時期の毛を二種類以上まぜあわせて使用しました。一方、筆軸に使われる材料も様々で、金・銀・めのう・ひすい・べっこうなどの高価なものもありますが、儒教の原則としては、儉素な竹の軸が良いとされ、特に全羅南道全州や、慶原の白竹が最上とされています。

### 〈墨〉

墨は古いものほど良く、その色合いは、黒さの中に紫色が漂うものが最上とされています。材料は煤で、それをはかきわめて香料で香りをつけます。煤には松の煤と油の煤の二種類があり、油の煤には更に桐の実、胡麻、榧の実などから取ったものがあります。煤を固めるにはかきは鹿の内臓から取ったものが最上とされています。香料にも様々な種類があり、瑞雲香・龍腦香・麝香などです。更に加工時に墨の表面に、彩絵・陽刻・陰刻などの装飾が施されます。産地としては、黄海道の海州と平安道の陽徳が有名です。

### 〈硯〉

他の文房具と異なり、割れない限り半永久的です。それだけに士人達の愛着心も強く、競って良い硯を所有しようとしていました。一般に硯は中国のものが有名ですが、朝鮮半島でも硯を積極的に作っています。特に保寧郡の藍浦の黒曜石の硯は有名です。また、素材も石だけでなく、木、銅、瓦、鑄鉄、磁器などいろんな素材で作っています。形も様々で、それに従って、風字硯・円硯・百足硯・桃形硯などの名称がつけられています。

### 〈水滴〉

水滴には、硯に水を一、二滴落とすような硯滴と、今回の展覧会にはとりあげられていませんが、汲み出し式の水盃との二種類があります。素材的にもやきものだけに限らず、金属のものも多くあります。器形は、丸形・方形・長方形・多角形・球形・輪形・扇形・花形・動物形など多様ですし、用途に合わせて大きさも様々です。また、文様についても、山水・花鳥・四君子・植物・動物・文字などきりがなほ多くあります。そして、その形や文様には、長寿を表わす桃形や福祿に通じる蝙蝠、吉祥の文字など、禁欲的な儒教の重視された時代ではありましたが、非常に現世利益的な、人間的な願望が込められているものが多くあるのです。

(このあと、スライドを使って、個々の作品を通じて詳細な解説がなされました。)(文責：友の会事務局)

## プロフィール

### 吉田 宏志氏

1940年札幌市に生まれる。慶応義塾大学文学部哲学科(美学美術史専攻)修了。現在、大和文華館学芸部次長。著書は、「高麗民画」朝日新聞社(共著)、「韓国絵画史/安輝濬著」吉川弘文館(共訳)など。

